

2025年3月9日発行
日本比較文化学会関東支部

2024年度第3号のレター発行となります。本号では、2025年3月8日(土)に東京未来大学にて開催されました「第64回関東支部例会」での支部会員の発表要旨について掲載致します。

日本比較文化学会関東支部事務局長 長田 元

◆第64回 関東支部例会 ご報告◆

2025年3月8日(土)、東京未来大学において第64回関東支部例会が開催されました。当日は5名の支部会員による研究発表が行われました。各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な合同例会となりました。以下、例会での会員の研究発表の要旨を掲載致します。

◆開会の挨拶: 関東支部 副支部長 郭 潔蓉 (東京未来大学)

◆研究発表:

うたごえ運動における〈共に踊る〉

放送大学大学院文化科学研究科博士前期課程修了
飯山 ももこ

うたごえ運動は、1948年に共産党の文化工作の一環として青共中央合唱団が組織されたことに端を発し、労働争議やデモという政治的な場面で〈共に歌う〉ことを通して展開していった。本研究は、うたごえ運動を〈共に踊る〉という側面から見ることで、従来〈共に歌う〉という点に着目される傾向にあった、うたごえ運動の新たな一側面を提示することを目的としている。

〈共に踊る〉という視点からうたごえ運動をみる際に重要な人物にぬやまひろしがいる。ぬやまは、関鑑子と共にうたごえ運動を提唱し、共産党の文化政策において歌と踊りを積極的に広めていった。本研究では、ぬやまの主管した雑誌や著作物への分析を通して、ぬやまの理想としていた若者像を浮かび上がらせ、他者の存在を意識し、波長を合わせる必要のある、〈共に踊る〉ことが共産党の文化政策として取り入れられたことは極めて自然であったことを示した。その上で、うたごえ運動において、欧米の異文化や性的逸脱等の否定的イメージと結びつくフォークダンスが積極的に取り入れられたのは何故かという問いを立てた。結論として、歌集やフォークダンス関連の教本に対する分析を通して、ダンスが纏う異文化としてのイメージを欧米ではなく、ロシアに求めることで、ダンスが纏う否定的なイメージの脱色を試み、フォークダンスを取り入れることが可能となっていたことを明らかにした。

本研究を通して、うたごえ運動は、個に籠らず集団を高めていくという志向性のある若者に担われることが期待された運動であったこと、また、社会的に否定的なイメージのあった対象を能動的に読み替えていく程度には戦略的運動であったという、うたごえ運動の新たな側面を提示した。

福音と情報の架け橋 ～韓国の教会と北朝鮮向けラジオ放送～

淑徳大学人文学部
田中 則広

北朝鮮＝朝鮮民主主義人民共和国では厳格な情報統制と宗教弾圧が行なわれており、外部情報やキリスト教信仰に関する情報の流入が極めて制限されている。こうした状況下で、韓国のキリスト教系団体が運営する放送局は、福音の伝達と生活に役立つ情報の提供を行なっている。

本報告では、これらのラジオ放送の概要と役割、直面する課題について考察した。その結果、各団体が限られた財政状況の中で、北朝鮮の住民への宣教活動に取り組んでいることが明らかになった。

また、教会によるラジオ放送の主な役割として、(1) 宗教的支援の面では、聖書の朗読や説教を通じて、北朝鮮内部のキリスト教徒が信仰を維持できるよう励ましてきたことが確認された。(2) 情報提供の側面では、厳しい統制下にある住民に外部の情報を伝え、世界の動向や韓国社会の実情を知らせることで、意識の変化を促していることが分かった。(3) 人道支援としては、健康や衛生など生活改善につながる実用的な情報を発信し、人々の暮らしを支える役割も担っていることが明らかになった。

しかし、こうした放送には、北朝鮮の政府機関による電波妨害や、放送聴取者の安全確保といった技術的・政治的な課題が存在している。特に、当局の監視を回避するための対策は不可欠であり、今後は安定した放送を維持し、より多くの住民に確実に届ける仕組みが求められている。

知識、善悪、キリスト教 —John Milton の Thomas Arnold への影響—

日本大学スポーツ科学部
桶田 由衣

本発表は、1828年から1842年まで英国パブリック・スクールの一つであるラグビー校の校長を務めた Thomas Arnold (1795-1842) が 17 世紀の英国詩人 John Milton (1608-1674) の作品から影響を受けていたことを明らかにする。Milton の作品が 19 世紀の英国の人々に影響を与えていたことは、先行研究でも明らかにされている。当時の英国において、Arnold は富裕層の子弟のためのパブリック・スクールの改革した人物であり、19 世紀の教育に多分に影響を与えた人物である。両者について言及している先行研究も皆無ではないが、その数自体は多いとは言えず、さらに Milton と Arnold の二人に焦点を当てた研究は少ない。一例を挙げれば、Arnold の弟子 Arthur Penrhyn Stanley が出版した *The Life and Correspondence of Thomas Arnold* の中に Arnold の伝記や書簡などが収録されており、その中で Arnold が Milton およびその作品について言及していたことが明らかとなっている。しかしながら、Stanley は言及箇所を列挙するだけにとどまっており、どのような文脈の中で Arnold が Milton とその作品について言及していたかを体系的にまとめて分析している研究は極めて少ない。本発表においては、Arnold の一部の著書と Stanley 著の *The Life and Correspondence of Thomas Arnold* を中心に、Arnold による Milton とその作品についての言及箇所を分析し、Milton の 19 世紀の英国の教育者に与えた影響という側面を明らかにする。

旧茨城県庁舎の外観デザインに関する分析 —欧米建築と比較して—

笠間市役所
相馬 法仁

置塩章（1881年～1968年）によって設計された旧茨城県庁舎（茨城県水戸市、現存）は、特徴のある外観を有する洋風建築である。置塩は東京帝国大学建築学科を卒業し、神戸を中心に官公庁建築を多く手掛けた。置塩によって設計された建物は、一般的にゴシック様式と認識されているものの、その詳細は未解明の部分が多い。先行研究に山室裕氏の研究（注1）がある。そこでは、旧茨城県庁舎はゴシック調の建築物であり、アール・デコ調の装飾が見受けられると指摘されている。本稿では、建物外部の装飾や建材を中心に、まず外観を分析する。欧米における当時の建築や外観のデザインに着目し、欧米建築との比較を通して解明する。比較する要点は、以下の3つである。

○置塩の学んだ建築学とその背景

東京帝国大学建築学科での当時の教育や欧米の流行の取り入れ方について整理する。当時の洋風建築の捉え方を把握するためである。例えば、昭和3年に木葉会によって出版された『東京帝国大学工学部建築学科卒業計画図集』（上下）では、置塩の卒業制作を含め、外観が洋風の建築が複数挙げられている。このような資料は、当時の建築教育における傾向を示す。

○外観及び景観の分析

特徴的なファサードには、セセッション風に見える装飾のピラスターが配置されている。また、屋上の一部には雷文が用いられている。このような外観の装飾は、旧茨城県庁舎の位置づけを評価するきっかけとすることができる。

○使用された建材の分析

旧茨城県庁舎には様々な建材が用いられている。土台周辺には県産の石材が多用されており、地元材にこだわったことも示している。このような建材を、当時の国内外の建材と比較することで、旧茨城県庁舎の当時の評価や理念を伺う資料となる。

（注1）山室裕（2009年）「置塩章研究序説その1—大正9年官庁営繕時代から昭和12年三田学園記念図書館までの作品系譜—」『平成21年度日本建築学会近畿支部研究報告集』,pp.737-740

明治期における関羽表象の変遷に関する一考察 —日清戦争前後を中心—

宇都宮大学大学院
国際学研究科国際学研究専攻博士後期課程
劉 晶洋

東アジアでは、数多く見られる関帝廟の中に祀られているのは、神格化されていた中国の歴史上の人物関羽である。彼は死後、唐の時代以降の人々に尊崇され、神になった。この関羽信仰は中国本土からの移民によって、中国周辺に伝えられ、建立した関帝廟も現在に至るまで華人社会の人的紐帯として重要な役割を担っている。また、関羽は小説『三国志演義』の主人公の一人として現在に至るまで東アジア諸国に伝播し、時に関羽信仰との融合をみせた。地理的に中国に近い日本も例外ではなく、前記のような形で伝来してきた。

現在の日本において、関羽の存在と聞くと、まずは関帝廟と『三国志演義』を想起するであろう。しかし、それ以外に、あまり華人と関わりのない数多くの日本特有の風習や山車人形や歌舞伎、大絵馬などの文化表象にもよく見られている。

本発表はこの日本特有の風習や表象に着目し、日清戦争前後を中心に歴史の変遷を考察する。

江戸末期から明治期にかけて、節句の日に家内には鍾馗や関羽の画像をかけ、その前に菖蒲、艾葉など花瓶にさし、門前には赤紙に菖蒲の根を包んでさげておく風習があった。また、関羽のシンボルである武器の青龍偃月刀は菖蒲うちや鯉のぼりに並び、子供の人気玩具であった。

文化年間、天下祭の神田祭にて八番の須田町二丁目の関羽山車人形は現れ、山車人形の中、最も人気を博した。明治期に入り、神田祭から山車の姿が消え、多くは江戸に憧憬し、商業が発展した地方都市に購入された。東京の職人に依頼し、新調した事例も多く見られ、関羽人形は人気だった。

しかし、日清戦争が勃発し、敵国清の国家神である軍神まで位置づけられている関羽に対して、意識的に排除する動きがあった結果、節句における関羽要素が完全に衰退し、また地方都市にて新調した関羽人形が山車からおろされた事象も確認できた。

本発表は、日清戦争期に刊行された画帖や錦絵などの一次史料を活用し、当時はいかに関羽表象を利用し、敵国清を評価したかを分析する。また、県・市史などから祭礼における関羽人形の扱い変化についても考察を行う。

事務局からのお知らせ

2025年3月8日に開催された総会にて2025年度活動計画を決定しました。

以下の日程にて例会を開催する予定です。皆様の参加をお待ちしております。

2025年度活動計画

2025年5月:全国大会(香川大学・高松市)

2025年8～9月:支部例会(東北地方または関東地方)※東北支部と合同例会開催調整中

2025年11～12月:支部例会(岐阜聖徳学園大学・岐阜市)※可能なら関西支部と合同例会

2026年3月:支部例会・2025年度支部総会(東京未来大学・足立区)